1、城陽市冑山1号墳の埴輪（2）

久保哲正（資料課長）

1．はじめに

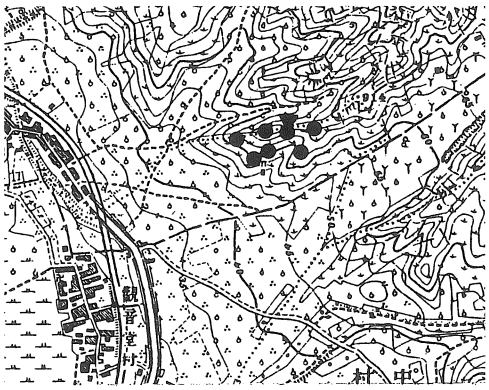
冑山古墳群は、城陽市大字観音堂小字甲畑の丘陵上に所在した古墳時代後期の古墳群である。この古墳群の発見の端緒となった冑山1号墳は、周辺に土砂採取が及んだ1966年5月に郷土史家の柏井光彦氏によって発見され[注1]、連絡を受けた京都府教育委員会文化財保護課が緊急発掘調査を実施したものである[注2]。1号墳全体に関する記述は、前回の報告[注3]に譲り、ここでは省略するが、この冑山の丘陵上においては、柏井氏を中心にした「忘れられたふる里の文化財を守る会」の方々による精力的な分布調査等が行われ、合計8基ほどで構成されている古墳群が確認された。しかし、古墳の基数は、もう少し多かったことが予想されている。そうした中で、発掘調査が実施できたのは1号墳と2号墳だけであった。

こうした経過の後、柏井氏宅に一括保管されていた冑山古墳群からの採取品は、現在、城陽市に寄贈され、今後、整理・活用が図られるものと期待される。

今回報告する資料は、前回の報告と同様、京都府教育委員会が発掘調査を実施し、当館において保管されている冑山古墳（1号墳）出土資料の内、90年度から整理、復原等を進めてきた埴輪に関するものである。前回の報告では、人物埴輪と鶏形埴輪、円筒埴輪を取り上げたが、今回は、円筒埴輪についてはその配列状況を加えて、また、形象埴輪として家形、蓋形埴輪などを、いずれも整理復原途中ではあるが、報告しておきたい。

2．埴輪の配列と円筒埴輪の特徴

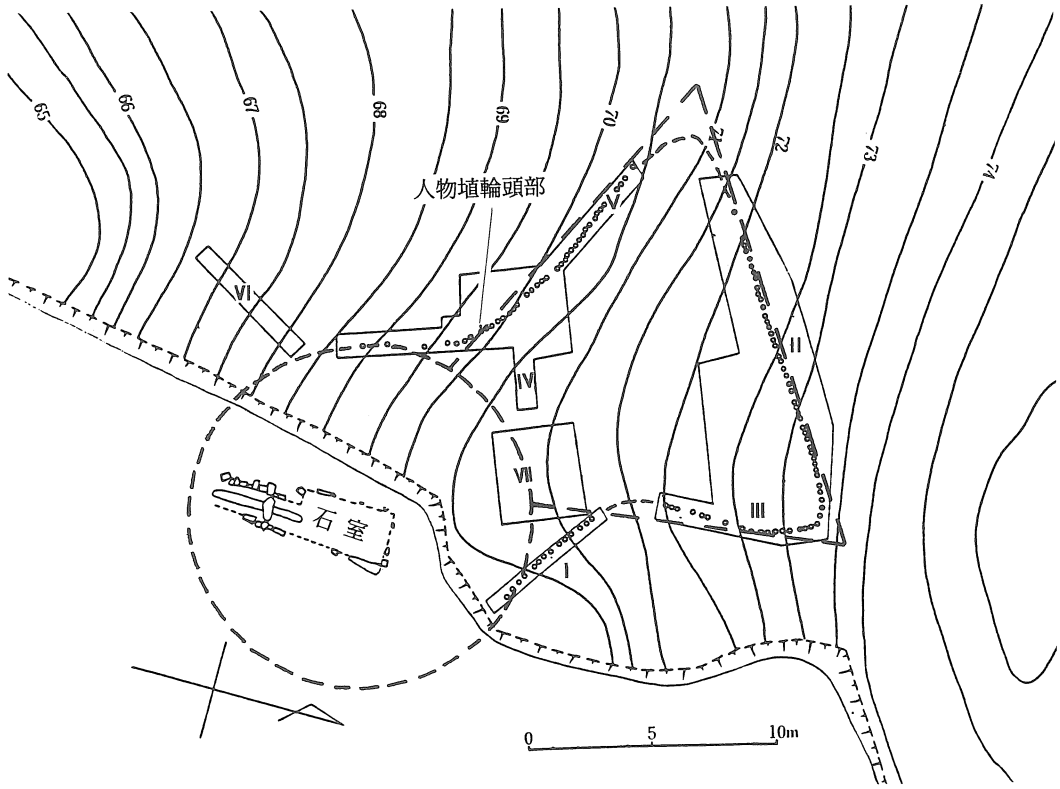
冑山1号墳は、木津川右岸の標高65～73mの丘陵上にあり、東から西にのびる尾根の南



第1図冑山古墳群位置図（仮製2万分の1長池駅）

側斜面に築かれた前方後円墳である。発掘調査開始当初の地形は、すでに土砂採取がかなり進んでいたため平坦化され、古墳の原形を留めていなかったが、墳丘裾と推定される位置で埴輪列が検出されたことから前方後円墳であることが確認された。しかし、尾根上ではなく斜面に築かれた古墳であり、しかも、後円部を斜面の下位に置いているため、墳丘裾の埴輪列は同一水準面には並ばず、前方部正面の埴輪列が最高位に位置し、くびれ部から後円部に向かって漸次下がって行くという配置になっている。これは、南に傾斜する斜面地が古墳築造の場所に選ばれ、なおかつ、南に開口する横穴式石室を後円部に築くという必要性から、全体的に前方部のほうが後円部より高所に位置する結果となったものであろうが、何故、このような条件の悪い位置にわざわざ前方後円墳を築かなければならなかったのかという点については、古墳群内において古墳築造について何等かの規制があったものかといった問題とも関係して興味が持たれるところである。

冑山1号墳の埴輪列は、前方部からくびれ部にかけてのほぼ全容が検出されたが、後円



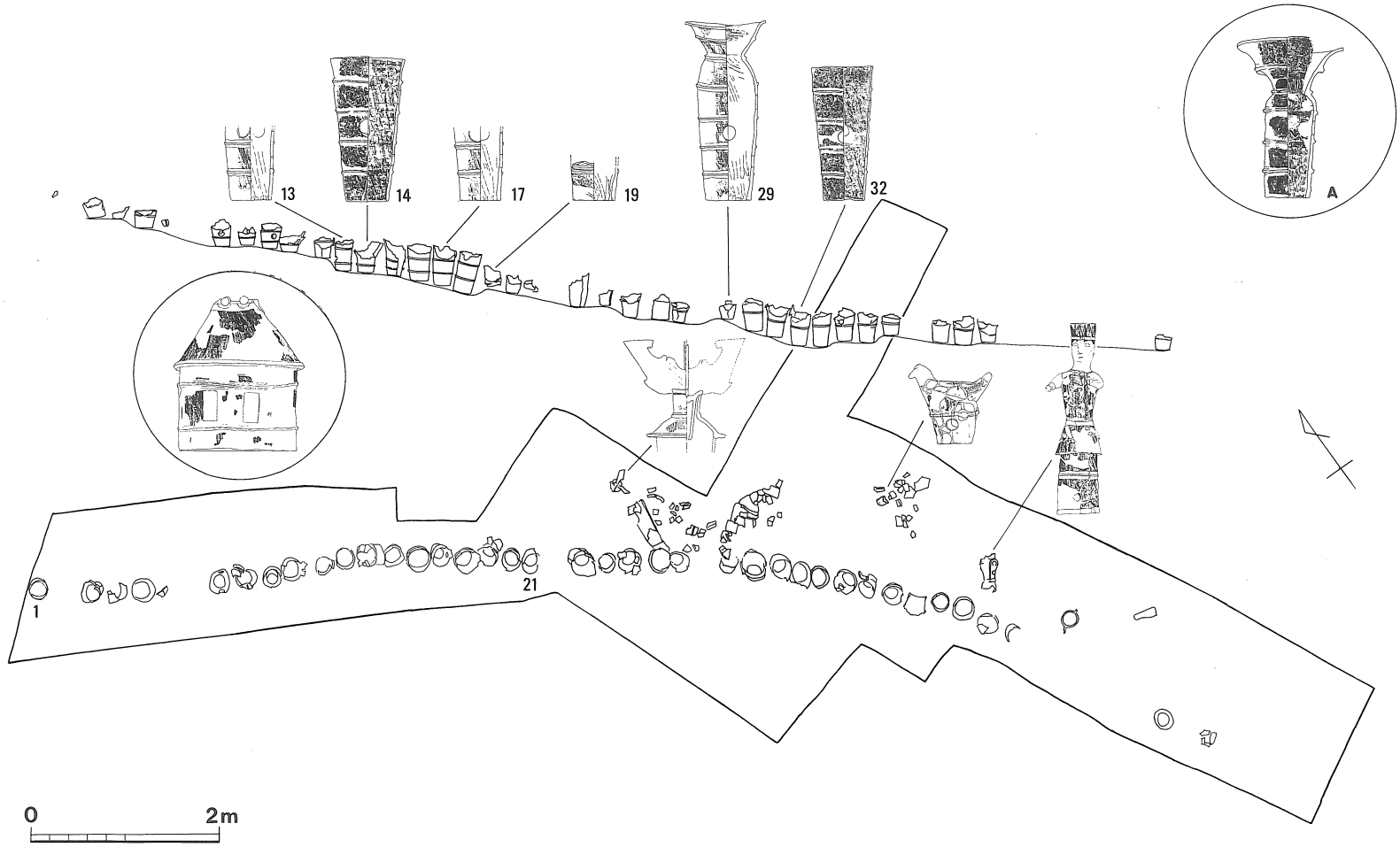
第２図冑山１号墳地形図（注３文献の図に加筆）

部の裾はすでに削平されていたため古墳全周での確認はできなかった。しかし、前回の報文の中で高橋美久二氏は、前方部の墳丘裾をめぐると思える埴輪列の形状等から第２図に示した墳形復原を行い、全長約25m、後円部径約15mという規模を想定された。また、埴輪列からという不確定要素は残るが、古墳の平面形態として、前方部前面の直角二等分線が両側くびれ部の中心を通らないゆがみを持った、いわゆる「片直角型」(注４)の前方後円墳であるとの指摘を行った。

埴輪の配列の細部については、現在も整理途中のため確定し切れていないが、ここでは比較的出土時の様相が明らかになってきた西側くびれ部を中心に説明したい。(注５)

西側くびれ部とは、第２図のⅣ・Ⅴトレンチを指し、前方部西北角付近からくびれ部を経て後円部にかかるあたりに相当し、古墳基底部を形成する埴輪列と多数の形象埴輪が検出されている。その埴輪列は、大部分が円筒埴輪で構成されているが、その列中に盾形や朝顔形埴輪が認められた。しかし、出土時の状況は、円筒部の基部だけが検出されているため、どれが普通円筒埴輪や朝顔形埴輪であるのか区別をつけるのは難しかった。ただ、形象埴輪の一部は、その台となる円筒の基部外面に突帯をめぐらしているため、埴輪列中でも普通円筒とは区別がつけられた。また、埴輪列以外のくびれ部に配置された形象埴輪についても何点かは、原位置を特定する事ができた。(注７)

底部外面に突帯をめぐらす形象埴輪の基部は、西側くびれ部で６本が検出されているが、これは、埴輪列38本（出土時の検出番号では41本が存在）中の約15％を占め、６～７本に１本の割合になる。しかし、遺物取り上げ後



第３図　西側くびれ部　埴輪出土状況

の移動に際して位置を示す番号が混乱し、現状の整理段階では、残念ながら、埴輪列の中でこのタイプの埴輪を特定できるのは、第3図の1と21だけである。このタイプの形象埴輪は、復原作業の結果から、石見型盾を含む盾形埴輪が多数を占めるようである。また、この底部に突帯をめぐらす形象埴輪は、北側列では1本、東側列ではみつかっていないところから、西側のくびれ部を中心にした場所に集中して樹立したものと思われる。

第3図の29とAは朝顔形埴輪である。Aの朝顔形埴輪については、前回の報告において示したものであるが、埴輪列中の位置は不明である。この2本の朝顔形埴輪を比べると、Aの埴輪では、タガが円筒部に3条、頸部とラッパ状に開く口縁部の中間にそれぞれ1条付され、透かし穴が円筒部の3段目に2穴を対向する位置に開けているのに対し、29は、他の円筒埴輪と同様に、タガが円筒部に4条あり、透かし穴は円筒部の2～4段目の各段に2穴を対向する位置に開けているという形態上の相違を見せ、タガ1段分（約10㎝）Aより高くなっている。また、成形・調整においては、ほぼ、同様の方法で作られているが、Aが他の円筒埴輪に比べて器壁が厚くなっているのに対し、29は普通円筒埴輪の上部に朝顔形の口縁部を付加したものであり、埴輪の口頸部より下半部だけでは円筒埴輪との区別が付かない。

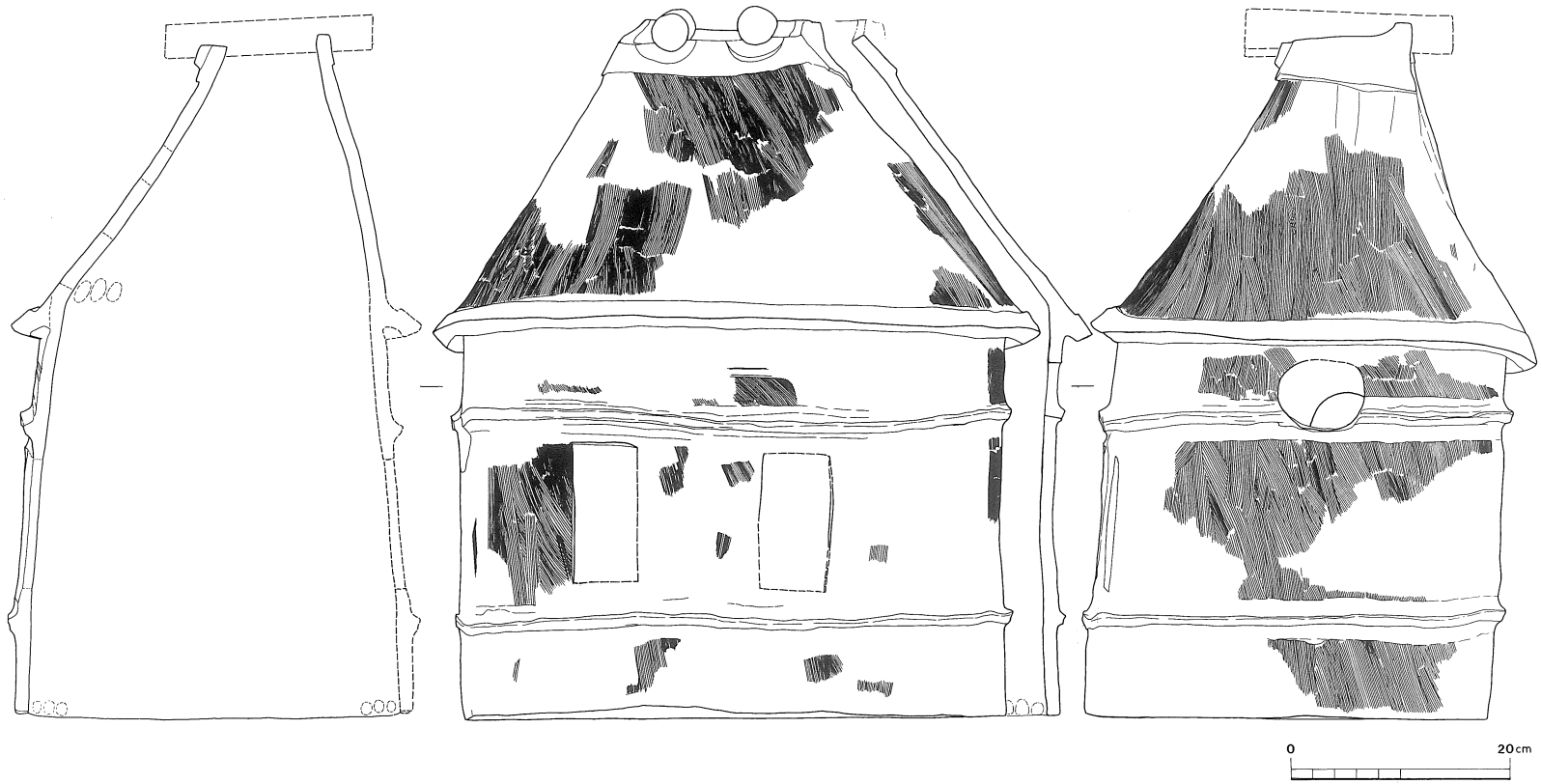
ところで、朝顔形埴輪は、この西側くびれ部に限らず、冑山1号墳全体でもその出土個体数は円筒埴輪の数量に比べて少ない。このことからみて、朝顔形埴輪は規則的に配置できるほどの量はなかったものと思われ、墳丘を取り巻く埴輪列は、基本的には普通円筒埴輪によって構成されていたものと想像される。そして、西側くびれ部を囲む一角だけが、普通円筒埴輪に加えて盾形や朝顔形埴輪を多数使用して飾られていたらしい。

西側くびれ部では、埴輪列の内側で多種類の形象埴輪が検出されている。埴輪の種類としては、家・蓋・盾・鶏・人物などが知られていたが、現在までの整理を通じて、馬形埴輪の存在も確認されている。第3図では、樹立位置の予想がついた形象埴輪のうち図化できたものを示した。このうち、家形埴輪だけは、出土位置が特定されないが西側くびれ部からの出土と考えられるため、同図に加えた。蓋形埴輪は、図示した以外にも出土品があるが、出土位置については不明である。発掘調査された部分が狭少であるため確定するのは難しいが、これらの形象埴輪は、西側くびれ部のほぼ中央だけにまとめて置かれていた可能性が強く、また、埴輪列の装飾的な配列からもこのくびれ部を形象埴輪の配置区画として認識していたものと思える。

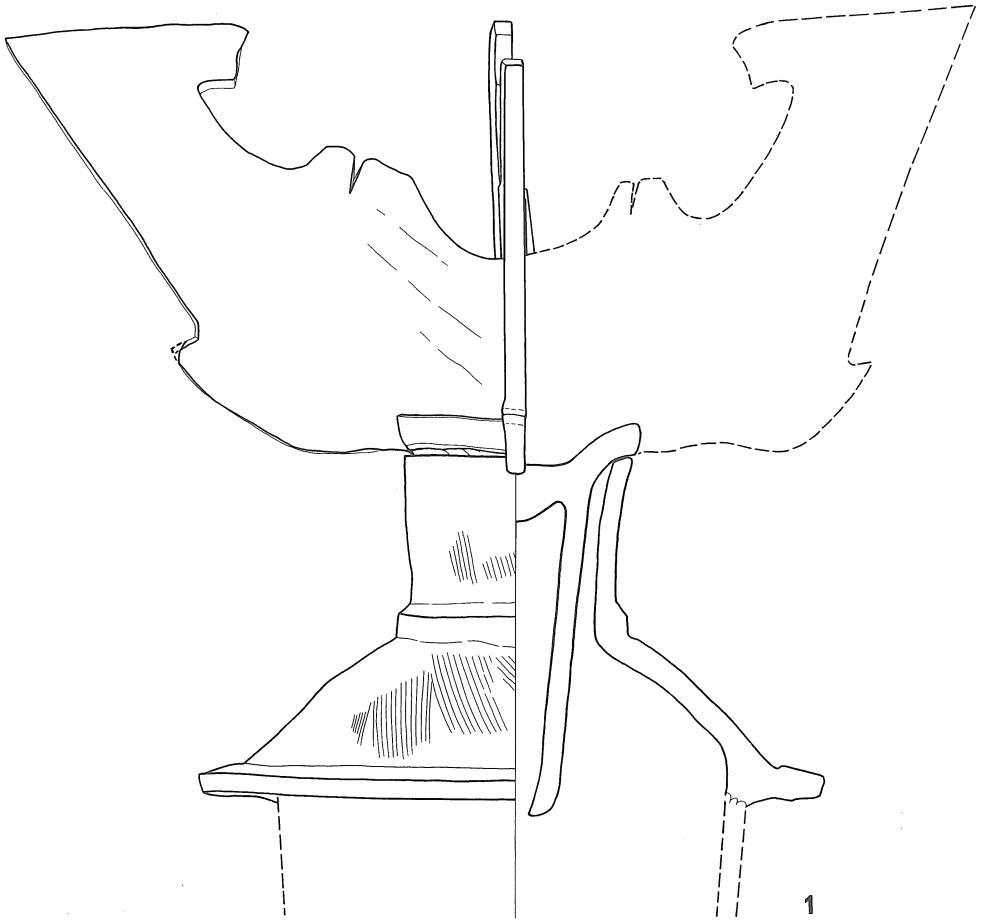
形象埴輪の大半が、西側くびれ部に置かれていたのは、石室の開口方向に合わせるとともに、周辺からの眺望として古墳を見た場合、南からが最適となるためと思える。

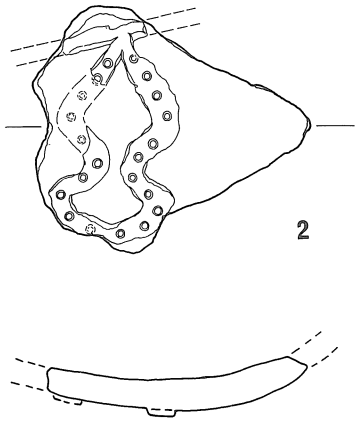
次に、埴輪の配列を通して見た円筒埴輪の特徴であるが、個々の円筒埴輪については、前回の報告に際して示した資料の復原図化以上には進展していないため、ここでは、その配列に関する整理作業を通じて認められた知見を2、3述べておきたい。

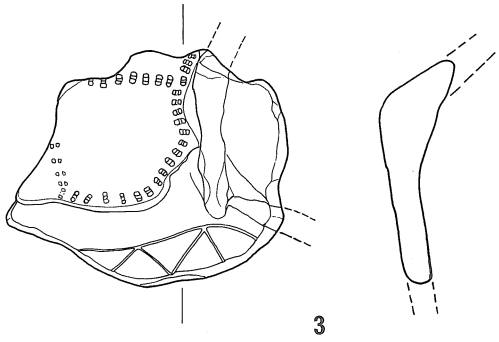
川西宏幸氏による円筒埴輪の5期分類編年の第5期[注7]に位置付けられる冑山1号墳の円筒埴輪の成形や調整については、ほとんどすべてが似通った技法によって作成されている。復原されたもので見る限り、円筒部のタガは4条で透かし穴は円筒部の2～4段目の各段に2穴を対向する位置に開けており、第5期の特徴である底部外面調整が大半の個体に認められる。そうした中で、埴輪製作に携わる各工人の細かい技術的差異や使用した調整道具の違いからくると思える個体差、また、埴輪窯での配置場所の違いからきたと思える焼成硬度の差などといった細部における異同もかなり認められる。



第４図　家形埴輪実測図







第５図　蓋形・馬形埴輪実測図

第３図の14と32の埴輪では、総高にして約５㎝ほど14の方が高い。これは、各タガ間の１段分の高さがそれぞれ１㎝ほど高くなっているためである。西側くびれ部では、この高く作られる14のタイプが多いが、復原途中の基部だけで見ても、32のような低いタイプの埴輪もかなりの数が存在する。外面の調整痕による差異として、17は、第５期の特徴である底部外面調整が認められないもので、外面の最終調整であるタテハケが底部の端部まで遺存している。(注8) このタイプも少量ではあるが、列中に認められる。また、外面のタテハケは、幅２㎝あたり約15～16本という細かいものと約８～９本の少し粗いものとの２種に大別される。埴輪の焼成状況でも違いがあり、明褐色から赤橙色の軟質のものと灰褐色の須恵質に近い硬質のものがあるが、調整法等の相違とは関係しない。出土埴輪の大半は、軟質のもので構成される。西側くびれ部において、上記の特徴が埴輪の配列に示されているかどうかについて検討を加えているが、現在のところ、明確な基準等は抽出できない。ただ、この内、ハケ目に関しては、西側では細かいタテハケの埴輪で構成されていたようで、粗いタイプは認められない。

埴輪の配列に関して、以上のようなことが判明してきた。ただ、冑山１号墳の墳丘裾を取り囲む円筒埴輪列は、今回報告した西側くびれ部以外に、前方部正面から東側くびれ部にかけてが検出され、その配列についても整理作業を通じて検討しているところであるが、今回は報告できなかった。今後とも、埴輪の樹立位置の確定等の資料整理作業が進めば、新たな展望が開けるものと思える。

３．家形埴輪

冑山１号墳の家形埴輪は、西側くびれ部から出土したものと考えられるが、原位置については特定できていない。また、遺存している破片の量も少なく、片面の平側については復原できなかったが、一応の復原・図化が完成したものである。(第４図)

家形埴輪は、寄棟式の住居を模したものであるが、他の形象埴輪と同様に、全体にかなり簡略化した造作になっており、形状も高さの方が幅を上回るという、若干、不安定なものとなっている。家の平側には、出入り口もしくは窓を表現した方形の透かし穴が２穴開けられているが、裏側については不明である。屋根棟上には円柱の鰹木が２本置かれた痕跡があるが、鰹木そのものは出土していないため、石膏復原を行った。屋根の頂部は、塞がっておらず吹き抜けになっている。壁体と屋根は、各々、粘土帯の巻き上げによって別々に作られたようで、その接合部には指押さえの痕跡が明瞭に残る。屋根の軒先には、接合部に合わせて粘土帯が張り付けられ、屋根の傾斜に沿って垂下させ、約3.5㎝の出を示す。壁体には２条のタガ状突帯が巡り、妻側の両側面には円形透かし穴が開けられるが、いずれも埴輪外表面のハケ調整を施した後に付されるもので、円筒埴輪と同様の技法によって成形・調整されたものと思える。埴輪の規模としては、総高64㎝（復原鰹木までの高さを含む)、屋根高約29㎝、平側基底部幅50㎝、妻側基底部幅36.5㎝、屋根の平側軒先幅56㎝、妻側軒先幅40.5㎝をそれぞれ測る。

４．蓋形埴輪ほか

蓋形埴輪は、第５図の１に図示した以外にも複数個体が出土しているが、今回、立ち飾り部と笠部を合わせて、ほぼ、１個体分が復原できたため報告しておきたい。ただ、この立ち飾り部と笠部が本来同一の個体として組み合わされていたものかという点については、現在のところ、確証はない。

まず、立ち飾り部であるが、漏斗状に作られた飾り板の受部に４枚の飾り板が十字形に立てられ、受部の底には立ち飾りの重心安定用に長さ約18㎝の軸が付される。受部の底は、

中空に作られ、飾り板を立てる段階で固定用の粘土で底を塞いでいる。各飾り板はそれぞれ、厚さ約1㎝という薄い一枚の板に成形され、その内側、外側ともに鰭が付くが、簡略化した表現になっている。飾り板の上端部については遺存していなかったため、図では直線的に復原した。また、飾り板の表面に通常認められる原体構造を示す線刻の区画は、見えない。磨滅を受けていることもあるが、表面の調整痕でも指ナデによる粗い仕上げで止められている部分が認められることから、省略されている可能性も強い。

立ち飾りを受ける笠部は、軸受部と笠部までが復原できたが、台部は現状では不明である。軸受部と笠部は、別々に成形され、後に接合されている可能性が強い。外表面は、粗いハケによって仕上げられた調整痕が認められるだけで、笠部の区画を示すような線刻はない。笠の先端の出は浅く、幅3～4㎝ほどの幅の粘土帯を巡らして笠の縁の表現にしている。

蓋形埴輪は、復原現存高42.5㎝、立ち飾り部での幅50.5㎝、高さ24㎝、笠部での径32.5㎝、軸受部の高さ9.5㎝、径12㎝を測る。

第5図にその他の埴輪として2、3を掲げた。いずれも細片であるが、馬形埴輪の一部と考えられる。冑山1号墳からは、これまで馬形埴輪の出土は知られていなかったが、形象埴輪の整理の中で新たに確認されたため、とりあえず図示しておきたい。

2は、尻繋もしくは胸繋から垂下する杏葉を表現した部分と思える。いわゆる剣菱形杏葉に近い形態が想像されるが、その周縁は竹管文によって縁取られており、原体に見られる飾鋲のようなものを現しているものかと思われる。この装飾部分での長さ11㎝、幅7㎝を測る。

3は、鞍を表現したものと思える。前輪もしくは後輪とともに鞍褥が表現された部分と思われる。鞍褥と思えるものは、革綴じを現したかのような列点文が周縁に巡らされており、柔らかい素材であったと想像される。遺存している14×12㎝ほどの破片の中に鞍全体のおおよそ4分の1ほどが表現されている。そのほかにも動物の脚部と思える埴輪片が存在するが、いずれもかなり小形のもので、上記の鞍や杏葉の大きさからも、馬形埴輪としてはかなり小形のものであったことが想像される。

（注1）柏井光彦「柏井レポート　1・2・3・4・5・6」(『月刊南山城』2・3・4・5・6・7号、1977～1978年)

（注2）堤圭三郎「冑山古墳発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1967)』京都府教育委員会、1967年)

（注3）高橋美久二「城陽市冑山1号墳の埴輪(1)」(『山城郷土資料館報第11号』京都府立山城郷土資料館、1993年)

（注4）石部正志・田中英夫・宮川渉・堀田啓一「前方後円墳築造企画の基準と単位」(『考古学ジャーナル』№150,1978年）で「片直角型前方後円墳」が提起された。

（注5）冑山1号墳の埴輪列出土状況実測図については、北山惇氏より提供を受けた。

（注6）第3図に示した西側くびれ部の形象埴輪の配置は、あくまでも想定図であり、厳密な位置確定には至っていない。また、蓋形埴輪については、今回、復原・図化できた資料を樹立位置に仮に置いたもので、本来その位置から出土したものかどうかは不明。

（注7）川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』64-2、1988年)

（注8）川西氏も、注7の論文中において第5期の円筒埴輪の特徴として底部外面調整を取り上げるとともに、この時期にも底部外面調整を施さない個体が混じることを指摘されている。